

學志館の教育理念

心の教育

生徒（人間）は身体と心で成り立っている。

車に喩えると、エンジンや車体が身体で、頭脳や心はハンドル・アクセル・ブレーキ・クルーズコントロール等を司る機関である。

車体は各パーツが問題なければ普通に走る。人間では健康ということになる。しかし、エンジンに問題なく健康であっても、無軌道に走り出したり、制御できないようであれば、それをコントロールする頭脳や心に問題がある。

児童・生徒の教育は、車のハンドル・アクセル・ブレーキを統御する頭脳・心に関わる活動になる。

頭脳は知覚・認識・知識に関わる機関である。人によってはこれですべてという人もいる。身体と脳以外何もない。しかし、教育に携わり生徒に勉強を教えるということをしていると、各教科の勉強により育まれる能力がすべてではないことに気づかされる。

動機という点から見ると、いくら優れた頭脳をもつ生徒であっても勉強しなければ、その能力を発揮することはできない。勉強することがあなたの将来にとっていくら得であり大切なことであるかを理論的に納得させようとしても、あるいはもし勉強をしなければどんな大変な人生が待っているかと脅かしても、それで分かったと言って、勉強に方向転換するほど単純では無い。

ということは、頭脳だけをいくら鍛えようとしても、動機付けを理論的に説いたとしても、教育的には半分のことしかしていないことになる。現実日本の教育はその半分のことに血眼になっているのではないか。

では、後の半分のものとは何か？

生徒にとっては「なぜ勉強しなければならないのか？」と言う問いが常にある。その問いに対し、先に述べた頭脳に訴えかける解答では不十分で一過性ものとして終わり、本当の動機付けにはならない。

教科の授業では頭脳に訴えかけることが中心だが、心への問いかけが根底に、そして常に流れていないと生徒の本心には届かない。一般的な生徒多数の動機ではなく、自分の心の願い「～したい」という思いにまで深く掘り下げること。そこから、自分と世界をつなぐ「仕事」「働き」という姿が見え始める。姿が見えてくると、生徒の心に勉強する意味と意志が根を張る。自分と世界は「仕事」を通じて繋がっているのだと。

こういうプロセスをたどることなしに、ただ目的的にゴールを設定してしまうと、志望校に入ったもののモラトリアムに陥るようなことが起きる。

学習を通じ、自分の心のベクトル、あり方を意識する土台を作ってあげることが學志館の基本であり信念である。

學志館の学びとは

- (1) 学科の基礎・基本を身につけるとともに、**学び方の基本姿勢**を身につける。

小テストの意義と効能：

学習習慣が形成されていない生徒に、具体的で短めな目標と結果を繰り返し体験させることで、粘り強く取り組み、その成果としてできなかったこと、書けなかった語句がかけるようになる充実感を体感させる。授業後の再テストは、間違いだけを直すという一見合理的なやり方に集約される弊害を防ぎ、近道を行きたがる心のあり方に問いかけ、勉強に取り組む際の気持ちの強さを重視する意味で重要である。

- (2) (1)をベースに各学科の理解を深め、応用力を身につけてもらう。
- (3) その学科の学習を通して、学科の基礎・基本を身につけるとともに、**学び方の基本姿勢**を身につける。
- (4) 学び方の基本姿勢を身につけたならば、**何のために学ぶのか**について考えるようになる。
*私たちが生徒と関わることでその生徒の持つ可能性を知り将来どういう方向に進んでいくのが望ましいかのイメージを共有するように努める。
- (5) 「何のために学ぶのか」について意識し考えることで、本当に自分が目指したいもの、為していきたいものを思い描き、そこと今の現実の自分は繋がっている感覚・意識をもつことができる。その結果、今取り組んでいる勉強の意味にも気づけるようになる。それが、まさに学習の動機づけになる。しかも、目先の動機づけではなく、可変可能な未来を抱きながらの本当の動機づけになる。
そういう動機に基づいた学びを一人でも多くの生徒たちができる学び舎が**學志館**である。